



臨床場面における反復される語りに関する研究 — ナラティブアプローチの視点から —

坂中, 尚哉

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6565号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006565>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏名 坂中尚哉
専攻 人間発達
指導教員氏名 森岡正芳

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

臨床場面における反復される語りに関する研究
—ナラティブアプローチの視点から—

論文要旨

心理臨床に身を置くものであれば、クライアントの同じような話に幾度となく耳を傾け、そうした繰り返される面接を経験したことであろう。筆者がセラピストとして駆け出しのころ、各臨床現場で経験したクライアントの同じ話の繰り返しに戸惑い、また面接の行方に不安を味わい、ケースによっては、同じ話に対する退屈感から眠気が誘われ、クライアントに対する興味・関心がなくなる面接を経験してきた。その都度、筆者自身のセラピストとしてのあり方や資質を自問自答しながらの臨床であった。臨床経験を重ねる中で、クライアントの回復とともに、繰返されていた語りが反復されなくなるケースや反復されるテーマの変化を経験するようになった。こうした臨床経験を契機に、臨床場面における「反復される語り」に関する臨床的な意義は一体何であるのか、また、反復されていた語りなぜ反復されなくなるのか、という問題意識が本研究に至る推進力となった。

さて、本研究は、臨床場面におけるクライアントの語りから内的世界を理解し、普遍的知見を得る方法論としてナラティブの視点を活用し論じる。本研究におけるナラティブとは、森岡(2015)の「プロットを通じて出来事が配列され、体験の意味を伝える言語形式」とする定義を踏襲し、セラピストは、クライアントの「語られた言葉と言葉で語られ得ない言葉」を最大限、重視する姿勢を維持し、クライアントの問題や葛藤の性質、過去の出来事を反復する「ナラティブ」に注目する。

従来、心理臨床場面において「反復される語り」についてどのように論じられてきたのであろうか。第1部第4章では、1983年創刊の心理臨床学研究に掲載されている単一事例研究を下敷きに、クライアントの「反復される語り」と読み取れる記述を抽出したところ、111事例のうち35事例において「クライアントは同じ話を繰り返す」などの「反復される語り」と解釈できる記述箇所があった。そのやりとりに対するセラピストの関与や意味づけがどのようになされているのかに関して、以下の2型に要約できた。

①型：セラピストが「反復される語り」をなぞる中で、セラピストの内的な体験(逆転移感情など)を手掛かりに幾度となく言語化を試みようとする関与のあり方。

②型：セラピストが「反復される語り」になぞる中で、クライアントの「反復される語

り」を同型反復的に捉えることにより、徒労感や無力感に苛まれる関与のあり方。

上記②型においては、「反復される語り」が単調であればなおのこと、同型反復的な語りとの印象を持ち、「反復される語り」の差異を見出しにくいと考えられる。上述の「反復される語り」に関する先行研究では、「反復される語り」がセラピストのどのような関与により、クライアントの単調な語りから広がりのある語りを展開するのか、十分に論じられてはいないことが明らかになった。

そこで本研究では、心理療法における「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方に注目し、クライアントの語り直す(re-telling)営みにセラピストはどのようになぞり得ることができるのか、複数の単一事例から臨床仮説モデルの生成を目的とした。

本論の第2部では、5つの単一事例研究から成り立っている。いずれの事例も反復されるテーマがあり、面接の初期には、そうした固執した語りを共有することから面接の関係作りがなされ、反復強迫的に固着した過去の出来事をセラピストに繰り返し語り直しながら、独自の新たな意味づけを行い、自己受容するプロセスが生まれている。

斎藤(2013)は、「複数の事例研究を、メタレベルにおいて分析し、何らかの提言を導き出すことにも意味はある」と述べるように、本研究では、心理臨床における実践知に基づいた仮説生成を重視している。その上で、総合考察では、臨床における事例研究そのものの立ち位置や限界を踏まえ、事例研究を相対化し、自己省察する営みを試みている。

以下に、臨床場面における「反復される語り」にセラピストはどのように関与しているのか、ナラティブアプローチにおける「なぞる体験」を手がかりに各事例の語りの差異ならびに意味生成についての臨床仮説の要点を述べる。

【目的に応える知見】

(1) 5事例の「反復される語り」に対するセラピストのなぞりのあり方

事例B、事例Cは、積極的にセラピストの身体感覚を手掛かりに「反復される語り」をなぞり、事例D、事例Eは、クライアントの「反復される語り」に対して沸き起こるセラピストの感情を手掛かりに言語的応答を行っている。しかし、事例Aは、「反復される語り」に対する徒労感や無力感を味わい、徐々に感情が平板化した状態となっていた。

(2) 5事例の「反復される語り」とその差異について

いずれの事例も反復されるテーマがあり、面接の経過と共にそうしたドミナントな語りは広がり、展開が生じ。事例Aは、「ボールペン談義から地球温暖化の語りへ」、事例Bは、「失投恐怖の語りから暴投してもいいとする語りへ」、事例Cは、「過去の配置転換の恨みの語りから現在の業務に対する語りへ」、事例Dは、「死にたい消えたい語りから未来に向けた進路の語りへ」、事例Eは、「母親から受けた傷つきの語りから虐待の世代間伝達を止めたいとする語りへ」、と各事例ともに固執された語りは、別の新たな語りへ引き継がれていき、クライアントは新たに意味づけながら、自己受容するプロセスが生まれている。臨床場面において、繰り返し自分の中に起きている出来事や起

きた出来事の意味づけを筋立てながら、出来事と出来事のつながりの意味を見出していることが各事例から読み取ることができる。いつしか反復されていたテーマやドミナントな語りは、反復されなくなっている。

(3) 「反復される語り」におけるプロットと意味生成の臨床仮説モデルの生成

楠本(2015)は、「一定の視点(語り手の視点)から語るべき出来事を取捨選択し、かつそれらを一定のプロット(plot;筋)に沿って配列していく『選択』と『配列』の作業を指す。これにより、物語には前後の方向性を持った時間の流れが生まれ、そこに意味が生じる。これこそがナラティブの本質と言える」と述べるように、対話におけるクライアントの出来事のプロット(筋立て)の変化に注目することは、語りの差異をより深く探求することにつながる。

例えば、事例Bは、ステージ1:「母が怖い」とする母親から受けた外傷的記憶を繰り返しセラピストに語る面接、すなわち「外傷的記憶の反復」の語りが続いた。ステージ2:外傷的記憶に基づくプロットを繰り返しながらも、同時に新たなプロットを語ることで、その意味を見出そうとする語りの差異が生じており、このステージは、葛藤に伴う循環的な語りを特徴としている。ステージ3:外傷的記憶に基づくプロットを繰り返しながらも、外的に新しい対人関係が生まれ、関係性の自由が拡大し、新たな自発的な出来事への意味づけが自然と現れ、かつ反復されていたドミナントな物語は反復されないのが特徴である。ステージ4:外傷的記憶に伴うドミナントな物語から物語的記憶への転換を特徴としている。

図1は、5事例を通しての「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階の臨床仮説モデルを示している。

ステージ1:

外傷的記憶に伴うドミナントな物語に縛られており、その物語自体が反復される段階

ステージ2:

外傷的記憶に伴うドミナントな物語と客観的な語りとの葛藤・循環する段階

ステージ3:

新たな自発的な出来事への意味づけが自然と現れ、かつ反復されていたドミナントな物語の反復が消失し、新たなプロットの意味生成の段階

ステージ4:

外傷的記憶に伴うドミナントな物語から物語的記憶への転換の段階

の4段階が「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階の臨床仮説モデルが想定される。

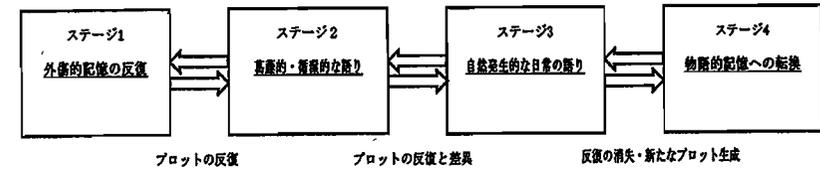


図1 「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階の臨床仮説モデル

(4) 「反復される語り」に関するセラピストの関与に関する臨床仮説モデルの生成

これまで5事例のクライアントの反復される語りに対するセラピストの内的体験を手掛かりに考察をしてきた。以下に、「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方の臨床仮説モデルを示す。

① 「反復される語り」に対するセラピストの同型反復的ななぞり

事例Aは、「クライアントの「反復される語り」を同型反復的な語りと捉えることにより、セラピストは徒労感や無力感に苛まれ、クライアントの語りをなぞりきれない関与のあり方」であり、セラピストはクライアントの語りを既知の語りとして聴いており、分かったつもりでいることがその特徴である。

② 「反復される語り」に対するセラピストの身体的体験のなぞり

事例B,事例Cは、「クライアントの「反復される語り」に対して、セラピストの身体的体験を手掛かりに、クライアントの語り及び動作の身体的模倣を試みながら、クライアントの心身の語りをなぞる関与のあり方」であり、セラピストはクライアントの心身の語りを未知の語りとして聴いており、分からない心持ちを維持しつつ、分かろうとする態度がその特徴である。

③ 「反復される語り」に対するセラピストの内的体験のなぞり

事例D,事例Eは、「クライアントの「反復される語り」に対して、セラピストの内的体験(逆転移感情など)を手掛かりに幾度となく言語化を試みながら、クライアントの語りをなぞる関与のあり方」であり、セラピストはクライアントの語りを未知の語りとして聴いており、分からない心持ちを維持しつつ、分かろうとする態度がその特徴である。

以上のように、本研究では、心理療法における「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方に注目し、クライアントの語り直す(re-telling)営みにどのようなことができるのか、単一事例から明らかにすることを目的としていた。

本研究の目的に答える知見の一つとして、クライアントの「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方は、①「反復される語り」に対するセラピストの同型反復

的ななぞり，②「反復される語り」に対するセラピストの身体的体験のなぞり，③「反復される語り」に対するセラピストの内的体験のなぞり，の3型が臨床仮説として想定された。

最後に、本研究において、各事例の病態や発達の特徴を含めた考察をするには及ばなかった。例えば、事例C,事例D,事例Eは、うつ症状を呈しており、うつ症状と「反復される語り」との関係については論じられていない。また、事例Aの自閉症のこだわりとしての「反復」現象とうつ症状における「反復」現象が、同じ地平で論じることの限界もあり、本研究及び今後の課題であると考えている。

論文審査の結果の要旨

氏名	坂中尚哉		
論文題目	臨床場面における反復される語りに関する研究 －ナラティブアプローチの視点から－		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	森岡正芳
	副査	准教授	伊藤俊樹
	副査	教授	河崎佳子
	副査	教授	吉田圭吾
	副査	立命館大学大学院教授	齋藤清二

要旨

本研究は臨床心理場面における「反復される語り」に注目し、語りに対するセラピストの関与のあり方について、単一事例研究法による臨床仮説モデルの生成をめざしたものである。本論は以下の2部から構成されている。

第1部：先行研究を概観し、臨床場面における「反復される語り」に関する事例研究上の特徴を検討した。日本心理臨床学会『心理臨床学研究』（1983～2005）に掲載されている単一事例研究111事例をもとに、クライアントの「反復される語り」と読み取れる記述を抽出したところ、そのうち35事例において「クライアントは同じ話を繰り返す」などの「反復される語り」と解釈できる記述箇所があった。その語りに対するセラピストの関与や意味づけがどのようになされているのかについて、以下の2型を抽出した。①型：セラピストが「反復される語り」をなぞる中で、セラピストの内的な体験（逆転移感情など）を手掛かりに言語化を試みようとする関与のあり方。②型：セラピストが「反復される語り」になぞる中で、クライアントの「反復される語り」を同型反復的に捉えることにより、徒労感や無力感に苛まれる関与のあり方。

第2部：5つの事例研究における実践知に基づき、臨床における事例研究そのものの方法論的な位置や限界を踏まえ、事例研究を相対化し、自己省察的な考察を試みた。いずれの事例も面接初期には、反復されるドミナントな物語があり、反復強迫的に固着した過去の出来事が反復される。いわば「受動的な反復」が生じている。

一方、そうした「反復される語り（受動的な）」を共有する営みを通して、クライアントは、過去の出来事を主体的に語り直そうとする「能動的な反復」を繰り返しながら、過去の出来事に対して新たな意味づけや自己受容するプロセスが見られた。5事例に共通する「反復される語り」のプロット（筋立て）の差異に注目したところ、「反復される語り」の意味生成過程が以下の4段階に分化可能とする臨床仮説が提示された。ステージ1:外傷的記憶に伴うドミナントな物語に縛られており、その物語自体が反復される段階。ステージ2:外傷的記憶に伴うドミナントな物語と客観的な語りとの葛藤・循環する段階。ステージ3:自発的な出来事への意味づけが自然に現れ、かつ反復されていたドミナントな物語の反復が消失し、新たなプロットによる意味生成へと向かう段階。ステージ4:外傷的記憶に伴うドミナントな物語から物語的記憶への転換の段階。

次に、5事例における「反復される語り」に対するセラピストの応答のあり方に関して、以下の3型が臨床仮説として生成された。①「反復される語り」に対するセラピストの同型反復的ななぞり。これについて事例Aにおいて「クライアントの「反復される語り」を同型反復的な語りと捉えることにより、セラピストは徒労感や無力感に苛まれ、クライアントの語りをなぞりきれない関与のあり方」が特徴的で、セラピストはクライアントの語りを既知のものとして聴いている特徴が示された。②「反復される語り」に対するセラピストの身体的体験のなぞり。これについて事例B、事例Cにおいて「クライアントの「反復される語り」に対して、セラピストの身体的体験を手掛かりに、クライアントの語り及び動作の身体的模倣を試みながら、クライアントの心身の語りをなぞる関与のあり方」が特徴として、明らかとなった。③「反復される語り」に対するセラピストの内的体験のなぞり。これについて事例D、事例Eにおいて「クライアントの「反復される語り」に対して、セラピストの内的体験（逆転移感情など）を手掛かりに幾度となく言語化を試みながら、クライアントの語りをなぞる関与のあり方」が明らかとなった。クライアントの心身の語りを未知の語りとして聴き、分からない心持ちを維持しつつ、分かろうとする態度がその特徴である。

以上をまとめると本研究では、クライアントの「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方は、①「反復される語り」に対するセラピストの同型反復的ななぞり、②「反復される語り」に対するセラピストの身体的体験のなぞり、③「反復される語り」に対するセラピストの内的体験のなぞり、の3型が臨床仮説として導かれた。

本研究は臨床心理面接事例を詳細に検討し、「反復される語り」の特徴と心理面接者の応答の基盤となる「なぞる」態度の専門的特徴をとらえた、独創性の高いものである。とくにナラティブの視点から、反復されるドミナントなテーマが変化していく特徴を明確化し、心理面接者の基本的態度に関する臨床仮説を導いたことは、臨床心理面接法の研究に大きく貢献すると認められる。よって本審査委員会は、学位申請者坂中尚哉が博士(学術)の学位を得る資格があるものと認める。

なお本論文に関して、申請者は6編の研究論文を発表しており、うち以下の2編が査読付き論文であるので、論文提出条件を満たしている。

- ①坂中尚哉(2010). スクールカウンセリングにおける自閉症の生徒との心理療法的関わり 心理臨床学研究, 27(6),727-732.
- ②坂中尚哉(2012). 心理療法における反復される語りから生まれる物語 臨床心理身体運動学研究, 14(1),49-58.